

●復 聖德太子傳曆 聖德太子奉讚會著

聖德太子傳曆は從來其の撰者ミ撰述年代ミが不明であり且つ後世の注記攙入が少からず加はつてゐるにせられたものであつたが、藤原猶雪氏は偶東京帝國大學購入の書籍中に其の原文を知るに足るべき書入を有する古寫本を發見し夫に依つて本書の復原を企て茲に『佛教研究』に其の結果を發表されたが其後關東地方大震災火災に其古寫本が灰燼に歸したが爲め其の復原本を印行して之を世に示さんとして茲に聖德太子奉讚會の查閱を経て上梓さるゝに至つたものが本書である。初めに復原された傳曆の本文を載せ次に其の考證が記されてゐる。考證は、現流本に引用せられたる古書並に傳曆に引載したる史籍の成立年代を考へて傳曆の其れに及ぶ、大正の震災火災に失はれたる太子傳傍注の史的價值、菅原爲長手寫寬元本の復原ミ現流本との對照、菅家正本ミ現流本並に其過渡期にある古寫四本の本文批評、菅家正本の由來ミ傳曆の編者及其成立年時、の五項に分ちて之を論じ、今後有力なる

積極的證左の舉らぬ限り菅家本を以て正本ミ信じ其の識語に現はれたる藤原兼輔を以て傳曆の撰者とし、其の撰述年時を延喜十七年九月ミ定めるミ説かれてゐる。傳曆は史的價值に乏しいものであるけれども之を復原し且つ撰者及び撰時につき論究されてゐるのは學界に寄與するところが鮮くない。(菊版一六五頁、聖德太子奉讚會發行、價一・五〇)(以上松野)

●船 舶 史 考

文學博士 新村 出著

言語學者である著者が近年世に著した船舶の名稱に関する論文三篇を集めてこれに増補を加へたもの。一、船の丸號、二、八幡船考、三、蘭船エラスムス丸ミ貨狄舟第一篇に於ては船の丸號が應永一一、五、二五附足利義持の御教書を初見ミすること、中古より器物を人格化し愛用の意味を含めて丸ミ稱する風起りし事船舶の丸號もその一例なることを説き第二篇は八幡の意義につき諸説をあげて研究し最後の篇は近來有名ミなれる足利在龍江

院のかてき様と稱する木像をその名稱より研究せるものである。著者の精密なる考證癖は趣味豊かな筆致と相俟つて讀者にあること、ろよさを傳へる裝禎亦之に合つてゐる。(四六判二一〇頁、價二・二〇、京都更生閣發行)〔肥後〕

●明季之歐化美術及羅馬字注音

北京輔仁大學景印本

明末の名墨工程大約字は幼博は、その別字の程君房を以て世に知らるゝ人であるが、その著の程氏墨苑は四庫全書編纂の時、既にその一部分を缺きしものか、彼の集なる幼博集を程大約撰とし程氏墨苑を程君房撰として、兩人の著の如く四庫全書總目提要に掲げられた程である。此の通行本の程氏墨苑卷三には利瑪竇贈文の一篇は見ゆるが、卷六下三十五葉以後にありし西洋宗教畫四幅をその圖説三篇は、之を全部闕けるもの、或はその中の圖説の右傍の羅馬字注音を闕けるものもありて、之は恐らくは清朝に天主教を禁止せる時削除せられたものであら

う。然るに近頃珍らしくも通縣の王氏鳴晦廬の藏本の中にその全部を存せるものが發見せられ、稀覯の史料として民國十六年九月即ち昨年九月に北京輔仁大學にて景印せられた。此處に紹介する本書は則ちそれである。申す迄もなく程氏墨苑は天地人物儒釋道の六集に分たれたものであるが、通行本には釋道を緇黃としてあり、而して天主教はも緇黃部の後に編入してあつたらしい。その天主教の部に此の西洋宗教畫四幅を利瑪竇撰の(甲)信而步海疑而即沈篇、(乙)二徒聞實即捨空虛篇、(丙)姪色穢氣自速天火篇の三文が編入せられてあつた筈であるが、削除せられて復た見る能はず、偶々王氏鳴晦廬本がその完璧を今日に傳へ得た譯である。三篇の文は三幅の宗教畫の解文である。その最も學者の興味を惹く點は景印する所の(丁)述文贈幼博程子篇と共に合計四篇の文の各々が何れも漢文の右傍に羅馬字を以て漢字の支那音を注せることで、その中には竇と蜜を混同視して共にHの音とせる様な誤も見受けられるが、(乙)(丙)(丁)の三篇には何れも萬曆三十三年歲次乙巳臘月朔撰文の年紀あれ